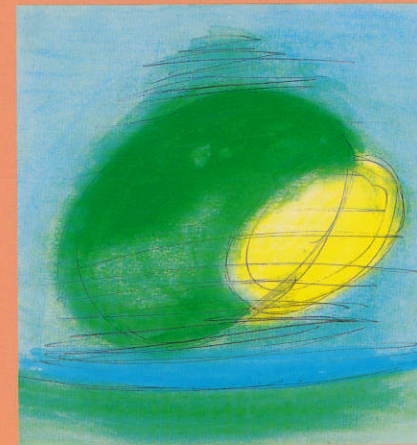


5-00
201
96

研究報告書第62号
K1-09

環境教育を推進するための 学校教育活動に関する研究

1996. 3



山形県教育センター



平成8年3月刊

環境教育を推進するための学校教育活動に関する研究

山形県教育センター

目 次

I 研究のねらい

II 研究の進め方

III 研究の内容

見直そう自分の学校・地域

組織編

学校教育活動全体でとらえます
組織・体制によって根づきます

意識編

共にめざす環境教育を考えます
共通理解を全体計画にあらわします
全体計画の例

実践編

年間指導計画に位置づけます
体験的活動を仕組みます
各学校の特徴を生かします

IV まとめと今後の課題

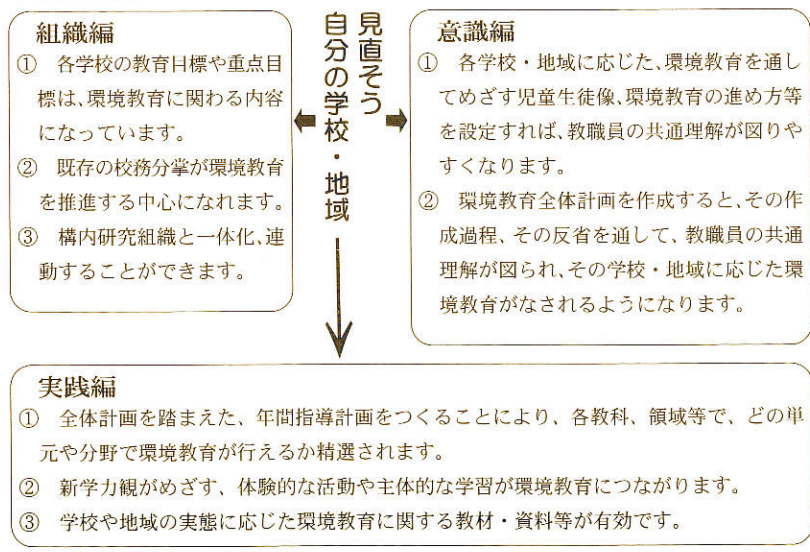
1 学校教育活動において、環境教育を推進するための取組みはどうかを明らかにする学校経営に関する研究です。

2 実態調査の結果、環境教育に対して、おもに次の点が浮かび上がりました。

- ① 教科・領域等で配慮した授業や活動をしている教員が多い。
 - ② 学校行事や教科・領域等で共通理解が図られていない。
 - ③ 学校目標等の位置づけや、組織・体制が不十分である。
 - ④ 共通理解を図ったり、実践する時間の確保が難しい。
- } 点として存在

他の教科・領域等の関連や連携を図りながら学校教育活動に位置づけ、“点として存在している環境教育”を無理なく“線あるいは面としての環境教育”にする必要が明らかになりました。

3 環境教育は、自分の学校教育活動と地域を見直すことからスタートすれば、無理なく学校教育活動に位置づけられると考え、次の段階として組織編、意識編、実践編の3つにまとめました。



キーワード（学校経営）（環境教育）

は し が き

山形県の学校における環境教育は、全国小・中学校環境教育賞において、小学校が3年連続で優秀賞を受賞するなど、全国から注目されているところであります。

また、県教育委員会では、平成6年3月に『山形県環境教育指針』をまとめ、これを踏まえて『小学校環境教育指導資料～みんなでつくるやまがたのかんきょう～』並びに引き続き『中学校環境教育指導資料』を発行し、数多くの実践例を紹介しております。本県における環境教育が着実に進展していることがうかがえます。

しかし、「今ある環境を未来の人類に伝える」という環境教育のねらいを達成するためには、さらに組織的・継続的に推進される必要があります。

本研究では、各学校において、いかに無理なく環境教育を根づかせることができるかを常に念頭に置いて取り組んでまいりました。そのため、環境教育に関する基礎研究と県内161校、2,553名におよぶ教育の実態調査を踏まえた上で、学校教育活動における環境教育の位置づけ方や推進の仕方に焦点を絞って研究してきたところです。また、広く浸透しつつある環境教育の重要性を再認識するために、県内の環境教育に関する有識者から貴重な意見をいただいております。

本報告書の提言により、環境教育を県内のどの学校においても教育活動に位置づけ、無理なく取り組めるようになり、地球にやさしい感性豊かな児童生徒が育つことを強く期待します。

終わりに、この研究を進めるに当たって、ご協力をいただいた学校、並びに各研究協力者、関係各位に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

山形県教育センター

所 長 長 谷 部 國 於

研究協力者

《平成7年度》

山形県立東根工業高等学校	教諭 富樫 義昭	教諭 鈴木 浩子
山形県立荒砥高等学校	教諭 小口 俊雄	教諭 丸山 正志

《平成6年度》

白鷹町立荒砥小学校	教諭 舟山 良美	教諭 菅原 透
鶴岡市立湯野浜小学校	教諭 長谷川 修	教諭 安藤 幸
酒田市立荒第一中学校	教諭 菅原 充	教諭 関 美奈子
村山市立葉山中学校	教諭 森谷 秀一	教諭 太田 光要
山形県立東根工業高等学校	教諭 富樫 義昭	教諭 鈴木 浩子
山形県立荒砥高等学校	教諭 新野 啓一	教諭 丸山 正志

《平成5年度》

白鷹町立荒砥小学校	教諭 横澤 洋子	教諭 高橋 和彦
鶴岡市立湯野浜小学校	教諭 佐藤 友子	教諭 安藤 幸
酒田市立荒第一中学校	教諭 菅原 充	教諭 渡辺 真里
村山市立葉山中学校	教諭 細梅 雅弘	教諭 太田 光要

研究担当者

《平成7年度》

指導主事	澁谷 和久
指導主事	横尾喜恵子
指導主事	鈴木 弘康
研究員	寒河江啓一

《平成6年度》

指導主事	澁谷 和久
指導主事	富士 直志
指導主事	保科 悟
指導主事	横尾喜恵子
研究員	寒河江啓一

《平成5年度》

指導主事	庄司 英二
指導主事	石垣 立郎
指導主事	澁谷 和久
研究員	佐藤 孝一

《平成4年度》

指導主事	庄司 英二
指導主事	石垣 立郎
研究員	佐藤 孝一

目次

I 研究のねらい	1
提言「学校教育活動における環境教育に期待すること」	1
II 研究の進め方	4
III 研究の内容	4
見直そう自分の学校・地域	5
組織編	
学校教育活動全体でとらえます	7
組織・体制によって根づきます	8
意識編	
共にめざす環境教育を考えます	9
共通理解を全体計画にあらわします	11
全体計画の例	13
実践編	
年間指導計画に位置づけます	17
体験的活動を仕組みます	19
各学校の特徴を生かします	21
IV まとめと今後の課題	22

I 研究のねらい

児童生徒や地域の実態を踏まえながら、学校の教育活動全体を通じて環境教育に位置づけて、さらに推進するための取組みはどうかを明らかにする。

平成4年度及び5年度の2か年間、「山形県環境教育推進協議会」の委員なされた3人の先生方から「学校教育活動における環境教育に期待すること」として提言いただきました。

提言1 なぜ環境教育が必要なのか

山形大学理学部地球環境学科 教授 原田 憲一

つい最近まで「21世紀」という言葉は希望にみちたイメージで語られていた。だが、現実には、あと数年で迎える21世紀の初頭には地球環境破壊と人口爆発が一層深刻化し、世界各地で食糧危機が頻発するだろうと危惧されている。さらに世紀半ばに一部希少金属が枯渇して先端技術の開発が阻害され、世紀末には工業社会をささえる石油が枯渇して文明そのものが崩壊するかもしれない、という悲観的予測すらなされている。

ところが、教育者のなかにさえ、現代文明の崩壊ときくと妙に達観する人が多い。人類は一斉に滅びるに違いないと誤解しているからだ。だが、今から6500万年前の白亜紀末に起きた恐竜大絶滅も、決して一瞬の出来事ではなかった。恐竜自体が百万年以上の年月にわたって生物学的に衰退していったところに巨大な隕石が衝突して止めを刺したのだと考えられている。しかも、メガトン級水爆が千発以上爆発したほどの衝撃を受けて廃墟と化した世界にも、しばらく恐竜が生き残っていたらしいことが化石から推察されている。これを現代にあてはめると、たとえ全面的核戦争で世界の大都市が瞬時に破壊されたとしても、また世界各地の原発がメルトダウンして死の灰を世界中にふりまいたとしても、あるいは環境破壊が一層進んで食糧危機に陥ったとしても、人類が瞬時に滅びることはない。むしろ早く死ねた人は幸いで、運悪く生き延びてしまった人々こそ悲劇だ。電気もガスもない廃墟で、放射能や化合物、重金属などの毒にまみれた水と食物を口にするしかないからである。そして、毒を飲み毒を食べた親から生まれてくる赤子たち。

そんな貧乏籤を引くのは誰か。今まで散々軍拡をあおり、原発の導入に奔走し、学びの場を競争の場に変えて若者を利己的行動に追いやりながら、利己的充足感が浸ってきた我々ではなかろう。我が子はまだ大丈夫かもしれない。だが、まだ見ぬ孫や曾孫はどうだろう。彼らは生き地獄で呻吟しながら、祖先の無知無責任を呪うに違いない。

こうした予測を将来の笑いの種とするためには、環境教育に通じた価値観の大転換が不可欠だ。にもかかわらず、いまだに高校や大学への進学率に一喜一憂する中学高校が多いという。保護者と生徒の夢をかなえさせたいとする善意の表れだろう。だが、それだからこそ我々は、「地獄への道は善意が舗装する」という警句を熟読玩味すべきではなかろうか。



提言2 最上川とブナと山形の環境教育

山形新聞社 論説委員 石川 敬義

山形県の山々は、春は柔らかな緑色に、夏は濃い緑色に、秋は紅色に、冬は白と黒に染まる。落葉広葉樹が山々の四季を美しく彩る。日本の風景の中で際立った個性を放つ風景であり、その演出者はブナの木を中核とする落葉広葉樹である。秋田県と青森県にまたがる白神山地のブナの原生林が世界遺産に指定された。しかし、ブナの原生林の延べ面積は、山形県が13万6000haで日本一多い。世界に誇るべき森林が山形県にもある。

太古には県土の全部をブナの木が覆っていたはずだ。ブナの森には太陽の光が差し込み、他の木や草を繁らせ、大気を浄化し、実が動物を養い、落ち葉が朽ちて豊かな土を作る。生命体を育てているブナの森である。200万年の人類の歴史のうち99%の時間を占めるのが、ブナの木などに支えられた狩猟採集を通じて人々は自然に関する深い知識、自然と共生する鋭い感性、生活を営む高度の技術を身につけた。

太古から存在し続けるブナの木の間にはフカフカした土が形成されている。それが降った雨や雪解け水を蓄える天然のダムになっている。その水は地下に浸透したり川に集まって海に注ぎ込む。水は、川で魚や昆虫を育み、ダムで電気を起こし、平野では水田を潤し、都市に飲み水を供給し、海で海草類に鉄分などを供給し魚に産卵場所を与える。山と海とをつなぐ命の水の動脈が全国第3位の流量を誇る母なる川・最上川である。

地球にある水のうち淡水は2.5%にすぎず、その淡水のうち人が飲める川や湖沼の水は0.3%にすぎない。川の水は酸素の助けを借りて自ら浄化する。清冽な最上川の支流の水もまた、世界に誇るべき貴重な水である。水は気体、液体、固体に変化し、海で蒸発し、ブナがある山で涵養され、最上川によって運搬され、県土空間を循環し続ける。循環するから人は昔も今も将来もその恵みを受け取ることができる。

県民の生活、産業、環境を根底で支える水とブナの同じ恵みを後世の人々に伝えることを環境学習の出発点にしたい。そのために、ブナの木に触れ、最上川の水に触れ、その恵みの大きさと大切さとを、しっかり感じ取りたい。



母なる川、最上川



ブナの原生林

最近、スズメの数がめっきり減ってきたように思われる。原因はいろいろ考えられるが、起因していることのひとつに、営巣に適した家屋がなくなってきたことであろう。すずめは人間に依存する野鳥であるので、以前は人家や土蔵の軒またはキツツキのあけた穴などに営巣し、雛も順調に育っていた。しかし、現在の建築物のほとんどにスズメが営巣する隙間など全くないので、当然繁殖に大きな影響がでてきたのではないだろうか。

めざましい科学の進歩と文明の発達、人間の生活にとって快適な営みをもたらす反面、これまで保たれてきた自然界のバランスを崩し、さまざまな弊害を生じさせている。

ワシントン大学のオリアンズ教授は、「地球上の生物の多様化を保持していくことこそ人間にとっても有益であり、絶滅する種を救うためには生態学と保全生物学の協力が不可欠だ。」と指摘し、生態系の崩壊は地球の滅亡につながることを警告している。

今や地球規模で広がっているさまざまな環境問題に対して、一人一人が自覚し実践することが大きな使命のひとつであろう。

学校教育の中で環境教育を推進していくためには、各学校の立地条件や環境は異なるにせよ自然と共生がいかに大切であるかを各教科・領域を通じて取り組むことである。「自然環境に恵まれていないから環境教育はできない。」など消極的な声を聞くこともあるが、学校の敷地内でも工夫することにより十分な体験をさせられる。敷地内のハクモクレンの冬芽が春の暖かい陽ざしに目を覚まし、一枚ずつ着物を脱いで純白な花を咲かせていくようすを観察させたり蜜に誘われて集まるハナアブの忙しそうに働いているようすを見せただけでも、子どもの心に変化が起ってくる。また、土と遊びながら生えている雑草や土の中の虫たちの生活や行動に目を向けさせれば、人間とこれらの生物が共に生きていくことの大切さを読みとるであろう。要は、教師自身が環境問題に対して逃げ腰にならず、積極的な姿勢で取り組むかにかかっている。

本校の4年生が、絶滅の危機に瀕している生物の資料を収集し、データの分析と自然保護を訴える本や新聞を作った。一人一人の人間が豊かに暮らせる環境は、「自然と共生」であり、それを守っていくのは一人一人の公共心である。そこに育まれた感性は、人間同志のかかわりにも温かい大きな力を発揮していくに違いない。



今、環境問題が科学、国際協力、経済活動、生活文化にかかわる問題として、広く認識されつつあります。こうした認識をふまえ、本研究では、環境教育の理念、さらに各教科間の連携等環境教育の教育課程への位置づけ、また環境教育における学校と地域とのかかわりなどについて、研究協力者所属校の実践等を踏まえながら、その望ましい取り組み方を提言していきます。

Ⅱ 研究の進め方

第1年次（平成4年度）

環境教育に関する文献によって、基礎的な理論研究を行い、さらに次年度実施する実態調査項目についての作成と検討を行いました。

第2・3・4年次（平成5・6・7年度）

県内の小学校・中学校・高等学校を対象として環境教育に関する調査を行い、実態や課題を把握しました。

また、平成5、6年度小学校2校、中学校2校に平成6、7年度に高等学校2校に研究協力者の委嘱を行い、各所属校の学校教育活動等を環境教育的な視点で分析して、より詳しい実態把握につとめました。協力者所属校の分析と調査の結果とあわせ、研究仮説を次のように設定しました。

研究仮説

環境教育の趣旨・理念を踏まえて、これまでの学校教育活動を見直し、学校の教育目標や課題、各教科等の目標、内容等との関連を図りながら、学校として計画的に取り組むことによって、環境教育は推進される。

この仮説を検証するために、環境教育を推進するための7つのポイントを作成し、その望ましい取り組み方について、研究協力者の協力を得て、実践上の工夫と課題等を明らかにしました。

Ⅲ 研究の内容

環境教育が根づかせる視点と実態調査の結果より、すでに各学校教育活動の中に存在していると考え、はじめに見直しから入ります。

次に環境教育を推進するための7つのポイントを組織編、意識編、実践編に分けて示しました。

各ポイントごとにその望ましい在り方を→で、研究協力者の実践内容や経過、工夫と課題等を○…で示してあります。

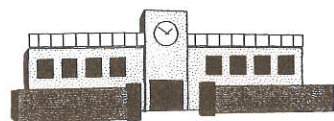
また、この研究としての視点や課題を□で囲み、示しました。

見直そう自分の学校・地域

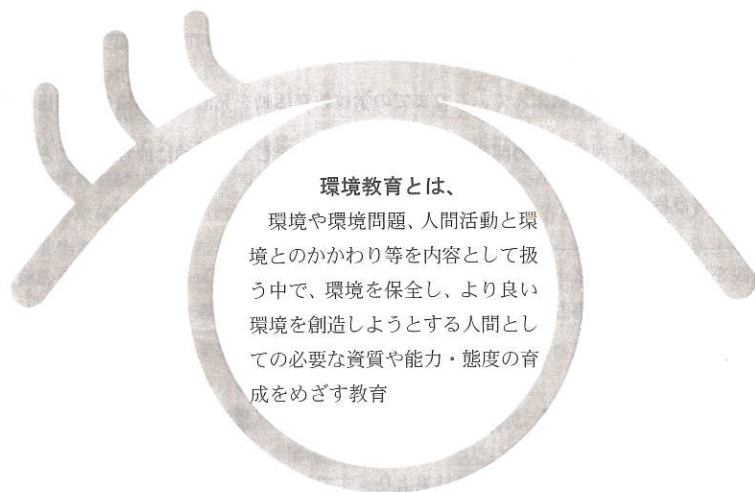
☞ 学校教育活動等の分析・検討項目 中間報告書 P18～21 参照

学校教育活動における環境教育のすべては、自分の学校教育活動と地域を見直すことから始まります。

環境教育的視点で 見直してみると



その学校の特徴
学校の授業、行事、PTA活動など



環境教育とは、

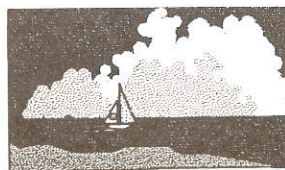
環境や環境問題、人間活動と環境とのかかわり等を内容として扱う中で、環境を保全し、より良い環境を創造しようとする人間としての必要な資質や能力・態度の育成をめざす教育



山や川、自然が多い地域



町場の学校、工場が多い地域



海辺に近い地域

自分の学校にあった環境教育が見えてきます

また、

「必要なのは十分わかっているのだが」の声に応えます

学校は忙しくて、他にやることがたくさんあるし…。

何から、どう始めたらいいかわからない

学校週五日制で、ただでさえ、カリキュラムをこなすのが精一杯なのに…

立派な実践校の例を見ると、自分の学校では、とても難しい

教科指導は、環境教育の基盤を担う



本来の各教科の持つ履修内容が環境教育になります

☞ 中間報告書 P18～21 参照

すでに授業や他の学校教育活動の中で、環境教育を実践している教師が多い

☞ 中間報告書 P37 参照

各学校・地域に応じた環境教育があります

- ☆教科書に自然への畏敬を学ぶ教材 → その授業を環境教育を意識したものに
- ☆近くの浜で砂の造形大会の行事がある → 地域の環境を活用した環境教育になるなあ
- ☆伝統的に生徒会活動が盛んな学校 → 生徒会活動と地域を巻き込んだ環境教育を
- ☆学校研究テーマと関わりが見える → 校内研の一環に環境教育を位置づけよう
- ☆学校にパソコンが入ることになった → パソコンを使った環境教育をしてみよう
- ☆社会科の巡検を行っている → その巡検を環境教育の視点で行ってみよう
- ☆特徴あるクラブ活動や課題研究テーマ → なんだ！環境教育をやっていたんだ

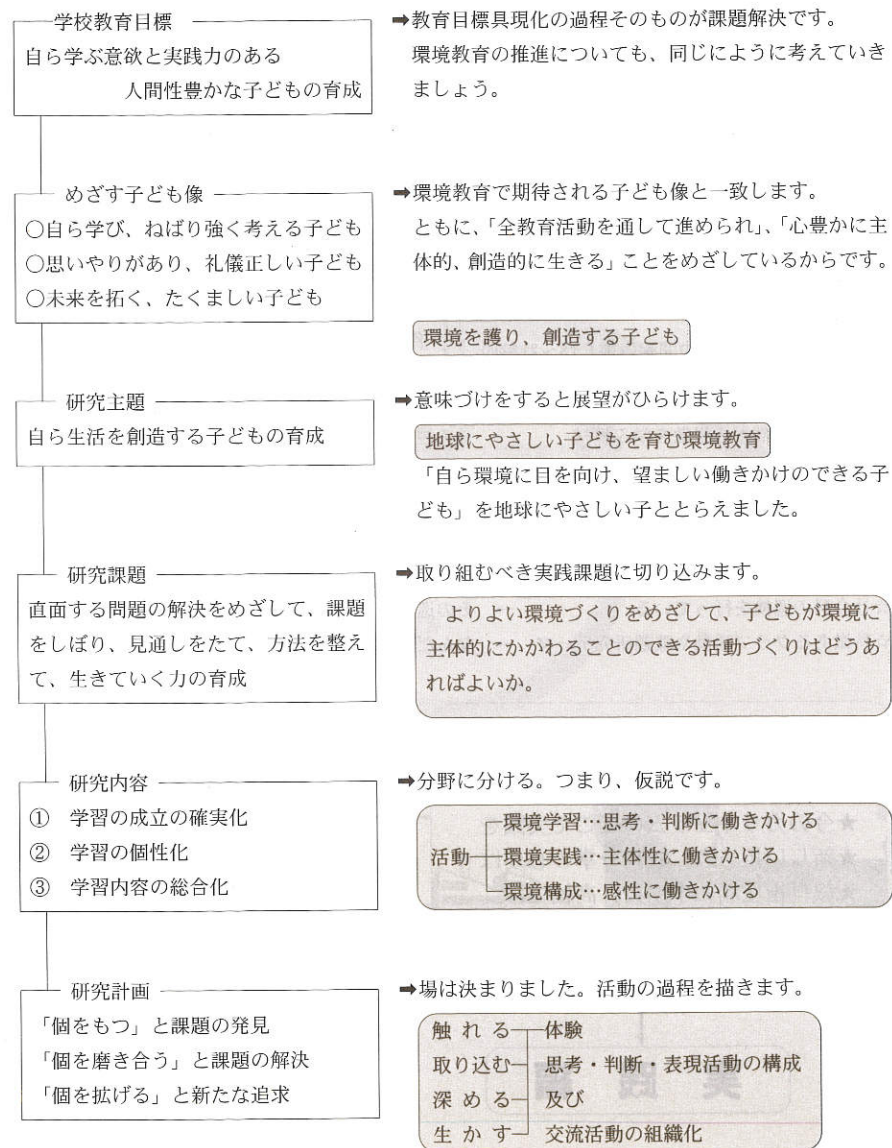
- ★それで、どんな児童生徒に育てる
- ★学校としての共通理解がなければ
- ★今のカリキュラムのどこで実践を
- ★新しい担当者、校務分掌の必要は
- ★教科担任制の中学校、高校では
- ★今までの授業にどんな視点を

組 織 編

意 識 編

実 践 編

ポイント1 学校の教育目標や課題との関連を図りながら、重点目標、経営方針等に環境教育に関する目標を位置づける。



ポイント2 各学校の実態に応じて環境教育を推進するための組織・体制の確立を図る

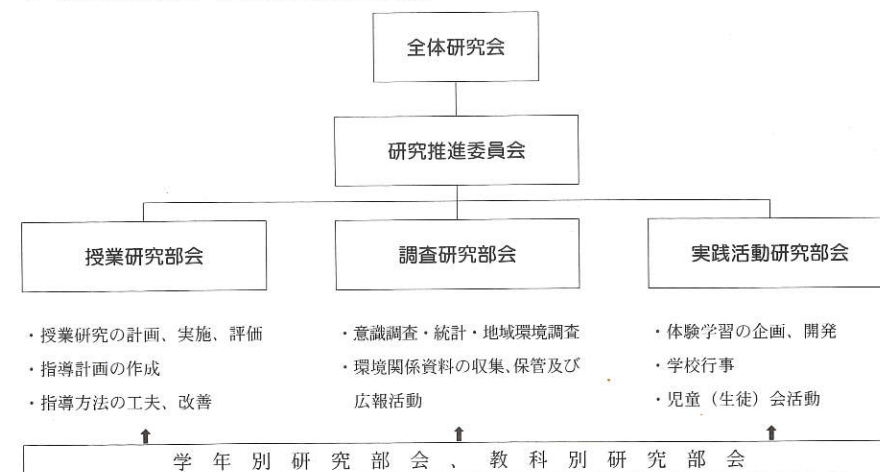
→ 既存の部や係の役割を生かします

- 環境教育の理念、目標、経営の方針等への位置づけ…………… 校長
- 全体計画、指導計画の作成…………… 教務
- 実施の促進と評価…………… 各学級・教科担当
- 各種指導資料、教材等の収集、情報提供…………… 研修、教務
- 研修の計画と効果的な推進…………… 研修
- 児童会（生徒会）の指導…………… 生徒指導
- 家庭や地域社会、関係機関・団体との連携…………… 教頭、総務

→ 必要に応じて、独立した部や係を設置します

- 環境教育推進委員会（特別委員会）の設置
 - ・役割……………環境教育の企画と推進
 - ・委員……………教頭、教務、研修、保健・生徒指導等の各担当者
- 環境整備部（係）の設置
 - ・役割……………校内環境整備計画の立案
 - ・係員……………教頭、教務、庶務、その他必要とされる教員（職員）

→ 研究推進組織と一体化または連動させます



ポイント3 各学校としての環境教育の必要性、環境教育の捉えかた、環境教育を通してめざす児童生徒像、環境教育の進め方等についての教職員の共通理解を図る。

(1) 教職員の研修会を設ける

→ いつもの職員会議の議題にのせます

- 4月当初の職員会議の学校教育目標や重点目標を確認する場で、環境教育の位置づけを確認しました。
- 各学期の反省会等で、環境教育に関する行事や授業等の議題にしました。

特別に時間を設け、会議を増やすことは難しい現状です。

→ 学校研究、校内研修会と関連させます

- 環境教育でめざすことが学校研究テーマと関連があり、学校研究の一環として取り組みました
- 「環境教育とは」を校内研修のテーマの1つに加え、環境教育の学習をしました
- 環境教育の担当の分掌から、事前に検討した資料や原案を全体会の前に配付することで、時間の確保ができるようになりました。

感性教育、主体的な学習、体験活動重視などは環境教育と関連づけられます。

文部省や県の指導資料等が参考になります。

→ 地域や学校の人材等を活用していきます

- 清掃事業所の方を講師にして、ゴミの分別の仕方を指導してもらい、早速、校内のゴミの分別を始めました。
- ソーラーエンジンづくりをしている先生の実践例を発表してもらい、環境教育を考える会を設けました。
- 市の都市計画課の方から、講演をしてもらいました。
- 昔の生活環境について、高齢な方から、話を聞くことも環境教育について、よい意識づけになりました。

日頃の実践が関心・意欲を高めます。

校内の先進的に実践している教師の事例や外部講師の話等が、教職員の意識の向上により効果的です。

(2) 広報活動につとめる

→ 環境教育コーナーを設置します

- 職員室前の廊下などに『環境教育コーナー』を設け、新聞の切り抜き、児童生徒が作ったポスターや作文、ゴミの分別についての呼びかけなどを掲示するようにしました。

新たに作らなくても図工・美術、国語の作文のテーマに普段から、環境教育に関するものがあります。それを活用します。



酒田市立第一中学校

- 職員室のコーナーには、使用した指導案、活用した資料などを掲示しました。

先進校の実践例なども見られるとよいでしょう。

- 図書室の本、資料をまとめた棚をつくり、環境教育の資料をみつけやすくしました。

教師だけでなく、児童生徒の意識も高まります。

→ 環境教育だよりを発行します

- 環境教育を担当する分掌から、推進状況を『たより』として職員に配りました。

研修会などの時間がとれない場合、たいへん有効です。

(3) その他

→ アンケート調査をします

- 教職員にアンケートをとるだけでも、意識の高まりがみられました。また、それを集計することにより、学校としての環境教育を考える資料になりました。

アンケート項目の例として、
☞ 中間報告書P29～31参照

意識編

共通理解を全体計画にあらわします

ポイント4 学校の教育目標や課題、児童生徒の実態、地域の実態等、各学校の実態に応じて環境教育全体計画を作成する。

(1) 全体計画を作る意義

⇒ 学校独自の無理のない計画になります

⇒ 内容が精選され、教育活動に位置づきます

⇒ 【実践】～【見直し】～【修正】によって、より無理なく、推進されます

(2) 全体計画の作成

⇒ 学校教育目標等との関連をもとに担当や分掌が推進します

- 環境整備部
- 環境推進委員会
- 環境教育主任

⇒ 自分の学校でめざす環境教育を考えるため、学校の実態を把握します

- 児童生徒の生活や遊び、環境との関わり方を調べるアンケートをとりました。

- この研究で使用した教員向けのアンケートを使いました。

学校の教育目標や教育課題等との関連を図ります。

職員どうして、どのような力をどの教育活動でつけるかがわかり、関連・連携が図られます。

共通理解を図り、意識を高めるために最も効果的です。

組織編で考えた、その学校それぞれの担当や分掌の方が中心になり進めます。

自然が多い農村地域なのに遊びといたらファミコンばかり→自然にもっと目を向けさせる環境教育を…などが見えてきます。

☞ 中間報告書
P 29～31 参照
環境教育に目をむけさせるきっかけにもなっていました。

意識編

- 学校教育目標等との関連を探りました (☞ 組織編参照)

⇒ 自分の学校でめざす環境教育の考えをまとめ、全体で共通理解を図ります。

- 初年度は、特別に研修会を設けましたが、2年目は、年度当初の職員会議の議題にのせました。
- 「環境教育たより」を発行し、意見を集めました。

⇒ 全職員が、自分の担当を次の視点で見直します

環境教育として実践しているものは？

環境教育とは意識せず実践しているものは？

視点を変えると環境教育になるものは？

環境教育の基盤を培う教育になるものは？

環境教育として新たに取り入れるものは？

教科、領域、学校・学年行事、生徒会活動、PTA活動・行事、地域の活動

⇒ 以上を取り入れ、全体計画にまとめます

- 様式は、文部省や県の指導資料を参考にしました。
- 取り組みにくい教科があり、まず位置づける教科を絞りました。
- どのような能力や態度を養えるかという視点で教科の位置づけを考えてみました。
- 担当者で全体計画にあらわしましたが、全員でさらに練り上げる時間がなかなかとれませんでした。

⇒ 全体計画を受け、年間指導計画に具体的に示し、精選します (☞ 実践編)

その他に、家庭や地域社会、地域行政等の実態も考えてみる必要があります。

初年度は、たいへんですが、校内研究と抱き併わせてなど、工夫してください。

研究協力者の学校では、これまでの教育活動で十分環境教育になるものがたくさんありました。

それぞれの関係を図に表すことができ、他教科との内容的な関連や視点の違いが見えてきます。

しかし、具体的にどう教科間の関連連携を図っていくか等が課題として残りました。

毎年、実践を積み重ね、反省と見直しの繰り返しが必要になってきます。

全体計画例《小学校》

環境教育推進全体計画

山形県鶴岡市立湯野浜小学校



全体計画例《中学校》

環境教育全体構想

酒田市立第一中学校



意識編

- 〔学習指導要領の基本方針〕
- 心豊かな人間の育成
 - 基礎基本の重視
 - 個性を生かす教育の充実
 - 自己教育の充実
 - 文化と伝統の尊重
 - 国際理解の推進

〔東根工業高等学校教育目標〕

- 個性を伸ばし、自主・自立の精神に満ちた人間を育成する。
- 責任感と正義感を持って、規律正しい行動の取れた創造性に富む人間を育成する。
- 健康で明るく、情懷豊かな、心身の調和の取れた創造性に富む人間を育成する。
- 他人との調和をはかり、誠実で、人のために尽くす人間を育成する。
- 科学技術を身につけ、正しい職業観と勤労愛の精神を持つ人間を育成する。

〔家庭や地域の願い〕

- 生活排水や家庭ごみなどの日常生活に関する環境問題。
- 工業廃棄物等による土壌や地下水の汚染。
- オゾン層の破壊、温暖化等の地球環境問題。
- 身近な自然の減少
- 国立公園などの自然環境の破壊

〔環境教育に関する重点目標〕

- 環境に関わる内容の理解だけでなく、将来、すべてで工業人として環境問題の発見とその解決に必要な能力を育成する。
- 環境問題に関心をもち、生活の中で意欲的にボランティア活動として問題解決に当たり、積極的に自然環境を保全する態度を育成する。

全体計画例《高等学校》

〔教科領域（教科・科目の環境に関する学習内容）〕

教科	科目
国語	人間と自然のかかわりあい、自然の美しさ、大切さを詩や随筆、小説を通して学ぶ。
地理	地球規模での環境問題などについて広く学習する。
歴史	近代における社会・経済の成長と生活革命など歴史的なかわりあいを学習する。
公民	都市、地方における生活上の諸問題、経済活動などについて幅広く学習する。
数学	人口問題と指数関数など数学との結びつきから自然現象を見る。
理科	自然界の現象について学習する。
物理	水・空気や化学現象などから環境を把握する。
化学	生物の集団と環境を学び、環境と生物のかかわりあいを学習する。
生物	健康にかかわる諸問題について、人間の体を中心に学習する。
保健体育	自然の美しさなどを音楽や絵を通して見つめる。
芸術	環境汚染や地球の温暖化など、英語の教材を通して学習する。
外国語	物理現象と工業技術とのかわりあいを幅広く、体験をしながら学び取っていく。
工業	実生活上における諸問題について細かく学び、実生活に即した生活方法を身につける。
家庭	

- 学校行事
- 校外の美化
 - 清掃活動
 - 勤労体験

― HR・生徒会

- クラブ活動
- ボランティア活動
 - 公園・河川の清掃
 - リサイクル活動

環境教育地域学習ソフト（CD-ROM）
荒砥町立荒砥小学校

マルチメディア教材で、説明が流れ、動画があり、隠しボタンを探せば、虫が鳴き出したりと楽しいいっぱい。



「ふるさと」の美しさやすばらしさに感動することにより、豊かな感性を育てていくことができます。

砂の造形大会 鶴岡市立湯野浜小学校



ポイント5 全体計画を踏まえて、各教科、領域等の年間指導計画に環境教育に関する題材、活動等を適切に位置づける。

(1) 年間指導計画に位置づける意義

⇒ 全体計画を教科等で具現化します

意図的・計画的な環境教育になります。

⇒ 重点化・焦点化が図られます

無理のない環境教育につながります。

(2) 年間指導計画作成例

⇒ 年度当初に作成している計画を生かします

○はじめに、既成の指導計画から関連項目をピックアップしました。

全体計画との関連・位置づけを意識し、精選する必要があります。

○教科によっては、その内容に間接的に関わるものはないか、または、基盤を培うものはないかという視点で見ました。

文部省や県の指導資料等が参考になります。

○既存の計画の関連項目に☆印をつけ、備考欄に、環境教育と関わる資料をのせました。

新しい学力観を育む授業が環境教育と重なります。体験重視、主体性や表現力を伸ばす指導の場面があたります。

教科名《家庭一般》

年間指導計画(4単位)

抜粋

月	学習内容	時間	指導上の留意点 ☆環境教育	備考(資料等)
6	・乳幼児の発育と保育 ・子どもの成長と家庭、社会		・母性像・父性像を問い直し男女と社会の共同責任として育児の在り方を考えさせる。 ☆子どもを取り巻く生活環境の変化に気づかせ、子どもの健やかな発育・発達を阻害する要因を調査させる。(アレルギー問題など)	母子手帳 離乳食(市販と手作り) おむつ(紙おむつと布おむつ)

⇒ 指導内容の適時性、指導時間に配慮します

○ 環境教育に関わる学校行事や特別活動の事前指導として、道徳や学級活動等の時期を考慮しました。

○ 指導時間は、教科等の決められた時数を越えないようにしました。

○ これまでの各単元ごとに設定していた「コース別学習の時間」や「ひとり調べ」の時間を活用しました。

組織編の環境教育担当者や分掌のリーダーシップが必要です。

その教科や活動の本来の目標を中心にして、教材や指導方法の工夫面で、関連を図れば、時数を越えないようにできます。

⇒ 他学年や他教科・領域等との関連・連携を図ります

○ 全体計画に基づく関連・連携は意識化できましたが、他教科との関連・連携を図るためには、各教科・領域間の共通理解を図る時間が必要になり、そこまでには、至りませんでした。

○ 各教科から提出された計画の環境教育に関わる部分を抜き出し、「環境教育指導計画」を作りました。

全体計画の見直しとともに、実践の積み重ねによって、改善していくことが大切になってきます。

この学校では、全体計画で、教科を絞り込み、学年や教科ごとの関連を見るために題材一覧表も作りました。

《環境教育題材一覧表》

抜粋

	1年	5年	6年	特別活動
四月	生活 がっこうをたんけんしよう 道徳 びよんたのくらし	社会 私たちの生活と食料生産 家庭 協力して楽しく生活しよう	理科 植物のつくりと水 道徳 花見のできごと	学行 交通安全 避難訓練
五月	生活 いきものとなかよくしよう 道徳 のはらはなにもおばあちゃんのきもの	社会 私たちの生活と食料生産 理科 植物の成長(2)たねの発芽	理科 物の燃え方と空気 植物の成長と養分 道徳 私たちの努力賞	学行 遠足・旅行 林間学校 クリーン作戦 相撲大会 運動会

ポイント6 環境に関する授業や活動等の工夫・改善を図るとともに、体験的な活動や主体的な学習を重視する。

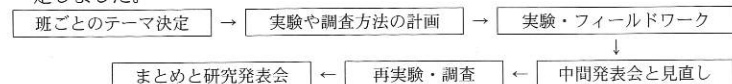
→ 児童生徒が主体となる授業にします

環境と人間のかかわりという視点が子どもの追求意欲に火をつけます。

→ 体験的活動が実践力を養います

計画から実践そしてまとめと発表までの全過程を体験させることが資質・能力の育成につながります。

○ 選択理科の時間に環境をテーマにした課題研究を設定しました。



○ 生徒会活動で、環境について考える活動を企画し、全校的な取り組みを行いました。

伝統的に生徒会活動が盛んな学校です。
校外班会を生かした活動が目立っています。

《環境教育推進期間活動計画》

月日	活動時間	主な活動内容
11/8	放課後 (委員会優先日)	生徒会執行部の企画・立案・スローガン決定 『残そう未来へ、この素晴らしい環境と美しい心を』
10	木曜集会 (生徒集会)	生徒会長による環境教育推進期間の話題提起 学級会、委員会活動への賛同の呼びかけ
14	学級指導	環境保全に関する話し合い 関連するビデオ、図書資料活用
16	学校裁量の時間	校外班で『街角探検』実施 地域の良さの再発見と問題点を把握
19	学校裁量の時間	同時に空き缶拾いなどのボランティア活動 報告書の作成
22	放課後 (委員会優先日)	委員会ごとに自分たちでできる環境教育について考える 次の木曜集会の企画・立案
24	木曜集会 (生徒集会)	学級での話し合いの結果や『街角探検』の報告 委員会活動としての提案・話し合い
29	放課後 (委員会優先日)	木曜集会の結果を受けて、関連する委員会の活動計画の作成 生徒会事務局によるまとめと広報活動計画
12/3	学校裁量の時間	委員会活動の活動計画の提案・話し合い
12/6	放課後 (委員会優先日)	計画の実践開始 Plan-Do-See表を作成し、活動の記録と反省、評価

→ 既存の活動を生かします

○ 遠足や宿泊研修、資源回収、駅の清掃などのボランティア活動等を環境教育と位置づけ、その事前・事後活動をあわせ環境教育として行いました。

担当者だけの方針では、行えません。全体計画に基づく全職員の共通理解が必要です。

○ 社会科で行っている「地域巡検」に環境教育の視点をあてました。

95年度 社会科巡検実施要項 (抜粋)

2 目的 西置賜郡の各地域を実際に観察して、地形・産業・施設・文化について学習し、郷土の姿を改めて見直す。

特に

- ① 地図と実際の様子を比較する。
- ② 集落の立地条件について考察する。
- ③ 交通路の実際とその変遷について理解する。
- ④ 史跡、施設、工場についての理解を深める。
- ⑤ 環境問題に関心を持ち、ゴミの分別の大切さを理解する。

3 日程 学校→深山観音→古代の丘→白川ダム→眺山放牧場
→船玉明神→清掃事業所→工業団地→学校

県立荒砥高等学校



生徒の喚声があがりました。
教室の授業では、そのゴミの臭いや量のすごさまで伝えることはできません。

実践編

各学校の特徴を生かします

ポイント7 学校や地域の実態に応じた環境教育に関する教材・資料等の開発・収集、蓄積に努める。

→ 情報を収集し効果的に活用します

- 道徳で、植物に詳しい先生が貴重な高山植物の写真を提供してくれたので、大きく延ばし、授業で見せました。
- 政治経済「世界経済と国際協力」の授業で、熱帯雨林破壊に関わるNHKビデオを活用しました。

その学校の人材、備品等を大いに活用します。
環境教育担当者を中心に
本・ビデオ等の資料収集が望まれます。

→ 地域の環境や身近な問題等を活用します

- 環境マップをもとにコンピュータソフト「環境教育地域学習ソフト」を作成しました。(P16参照)

こんなすばらしいところがあるよ

年 組 ご芳名

(例)

- ・夏になると、ホタルがたくさん飛ぶよ
- ・春一番にふきのとうが芽を出すよ
- ・樹齢何百年の木があるよ
- ・沢蟹がすんでいるよ

植物、動物、景観、残しておきたい場所、遺跡、文化財等いろいろの分野にわたって、自由にお書きください

マップにのせたいところ

地図

(保護者用アンケート 抜粋)

児童用パソコンがはじめて入った学校でした。
どの学校でも自分の学校に合った環境教育の実践が見つかるはずです。

学校と地域が一体となった活動です。
児童生徒だけでなく、環境教育に対する保護者の関心が高まりました。

Ⅳまとめと今後の課題

環境教育は、自分の学校教育活動と地域を見直すことからスタートすれば、無理なく学校教育活動に位置づけられると考え、次のようにまとめました。

意識編

- ① 各学校・地域に応じた、環境教育を通してめざす児童生徒像、環境教育の進め方等を設定すれば、教職員の共通理解が図りやすくなります。
- ② 環境教育全体計画を作成すると、その作成過程、その反省を通して、教職員の共通理解が図られ、その学校・地域に応じた環境教育がなされるようになります。

組織編

- ① 各学校の教育目標や重点目標は、環境教育に関わる内容になっています。
- ② 既存の校務分掌が環境教育を推進する中心になることができます。
- ③ 校内研究組織と一体化、連動することができます。

実践編

- ① 全体計画を踏まえた、年間指導計画をつくることにより、各教科、領域等で、どの単元や分野で環境教育が行えるか精選されます。
- ② 新学力観がめざす、体験的な活動や主体的な学習が環境教育につながります。
- ③ 学校や地域の実態に応じた環境教育に関する教材・資料等が有効です。

見直そう自分の学校・地域

- 各学校には、地域の自然や文化・伝統に根ざした教育活動がありました。
環境教育を「無理なく」推進することは、それらを「つなげて見直す」ことだと考えております。それは、子どもと地域、教科と教科などあらゆる「もの」と「ひと」と「こと」とのかかわりです。
- 授業でゴミ問題をどう扱うか。社会科と家庭科と生徒指導の担当が語り合う。そして夢は膨らみ、やりたいことが山と・・・。
こんな時、教科・領域間で「折り合い」をつけて精選していかなければなりません。環境教育はもはや保全と開発との対峙ではなく、人間と環境との折り合いが大切であるように、環境教育の推進には、あらゆる面で「共生」が求められています。
- 環境問題に取り組む児童生徒は、強い課題意識をもち、思考し、表現し、生き生きと学習を進めていました。これまで児童生徒の意欲を問題にしていた教師が、今その意欲に驚いています。環境の破壊に対する強い危機感について、学習環境の構成者としての教師の意識と、学校の取り組み方を見直してみたいものです。

平成 8 年 3 月 18 日 印刷

平成 8 年 3 月 20 日 発行

発行者 山 形 県 教 育 セ ン タ ー

天童市大字山元字犬倉津 2515
Tel(0236)54-2155

印刷所 アベ印刷株式会社

山形市船町 82
Tel(0236)81-1951

本資料は再生紙を使用しています。